

ハッピーカラープロジェクト再び!

絵画や絵本、商品デザイン、テレビ出演などジャンルを超えて活躍されているアーティスト、マヤ・マックスさんと入院中の子ども達が色遊びを楽しむハッピーカラープロジェクトが、6月15日に、子ども医療センター4階のクリエイティブ室で行われました。

クリエイティブ室の床いっぱい敷かれた白い紙、その上に置かれた様々な色のアクリル絵の具……子ども達は、目を輝かせて使いたい色を選び、手や足や筆を使って、自由に描いていきました。マヤさんと一緒に、ためらうことなく手や足に絵の具をつけ始める子もいれば、絵の具に

触れるのを躊躇している子もいました。中には、経験したことのない感触に驚き嫌がって泣く子もいました。また、筆を持ったものの紙をながめ、時間をかけて描き始めた子もいました。

皆のパワーが詰まった作品は生き活きとしていて、会場を華やかにしました。

色のもつパワーを借りて、子どもが子どもらしく過ごせた瞬間だったと思います。

平成23年度ボランティア説明会開催

例年マクドナルド・ハウスと合同で年1回ボランティア説明を行っています。今年度は4月17日(日)に実施しました。3.11の東日本大震災の後でしたので、参加者があるか心配しましたが、31名の参加があり、その内20名の方が登録して下さいました。小児感染症抗体検査並びにオリエンテーション等を終え、現在様々な分野で活動して下さいます。どうぞ、よろしくお願い致します。

安全対策に手芸が活躍

3.11 東日本大震災では、大勢の方が大自然の恐怖を味わったと思います。子ども医療センターにいらした子どもやご家族の方は幸い無事で、物もそれほど散乱する状態ではありませんでした。しかし余震が多く、病棟から点滴台の転倒防止用のヒモがあると便利との声が届きました。そこで早速手芸ボランティアの久米さんが40本のヒモを作して下さいました。早急に対応して下さい感謝致します!

子ども達がジャガイモ収穫

6月24日(金)に、子ども医療センターに入院している子ども達とジャガイモ掘りを行いました。ジャガイモは、センターの一角にある畑で園芸のボランティアの方が育てて下さいました。入院していると畑で育てている野菜を見る機会が少ないだろうと、開設当初から春はジャガイモ、夏はミニトマトやキュウリ、ナス(ちなみに今年にはオクラ、トウガラシです)、秋はサツマイモを育てています。お芋の収穫日は、無事に育っているか?とドキドキでしたが、今年もまずまずの収穫です!



七夕コンサート開催

7月5日(火)に、外来吹き抜け広場(別名:たまご広場)で、七夕コンサートを行いました。検査室が近くにあるため、ボランティアの小塚さん達には音量を調整していただくなどのご苦労もありましたが、快く引き受けして下さいました。30分程度でしたが、たまご広場で食事をされている方や診察を待っている方、また広場を通過する方々の耳に心地良く響いてくれたのではないかと思います。



夕涼み会のお神輿制作

装飾ボランティアの椎名さんが、今年も8月の病棟夕涼み会のためにお神輿を作ってくれました。

「装飾の作業を行うときは、構えないで、肩の力を抜いてやっています。そうすると手が自然に動いていき、イメージがどんどん広がって、創ることが楽しくて、楽しくて!! 作品に取り組む時は、子どもが見たときに思わず触りたくなるようなものをと日々思っているのです。出来上がった作品を見て、子どもが思わず触ろうとしたら『やった!! 成功!!』という気持ちです。また、お子さんと一緒に家族の方もとても頑張っているの、親御さんたちに見てほしくて作った作品もあります。それを見て、一瞬でも心ほっとする瞬間があったら嬉しいです」(椎名さん)

この作品は、入院している子ども達に季節感を運んであげたい、実物にできるだけ近づけて、お祭りの雰囲気を楽しんでほしい、という思いで作ったものです。



外来ボランティアの活動

「ある日の一言」

当初から見守りが多く、アクティブな活動が少ない外来ボランティアに『これでいいのだろうか? お役に立っているのだろうか?』

と迷うことも多々ありました。しかし、4年を経た今、桃井センター長の『居てくれるだけで癒しになります』という言葉が、心でわかるようになってきました。『おはようございます』『こんにちは』『お大事に!』などの声により、子どもやご家族の方から笑顔が見られると、少しばかりボランティアとしての役目が果たしているのかなと、心から喜びを感じます。(外来活動歴4年)

「外来で待つ子どものために…」

外来で待っている子どもたちを対象に、ボランティアによる読み聞かせ、エプロンシアター、紙芝居などを試み始めました。中待合室3のプレイコーナーで週1回、1時間程度で行っています。長く待っているお子さんが多いため、少しでも苦痛を和らげてもらえればと思っています。夏休み中は患児のきょうだいも多く、好評です!! ニーズがあれば、今後も継続していく予定です。



3.11それぞれの震災—

災害ボランティア活動に参加して・・・ 吉田憲一郎

私にとっての3.11は、友人の安否確認から始まった。4月に宮城県亶理町に行き、友人夫婦の無事を確認したが、兄夫婦が津波の犠牲となった。国道6号線が生死を分けた。流された場所に行き、深く頭を下げた。友人宅は、被災した直後から災害ボランティアの一時宿泊所として提供された。この事が私を活動へと駆り立てた。

6月と8月に福島県いわき市での活動に6日間参加した。6月は、沿岸の漁師民宿で倒壊した倉庫の中から必要な角材、コンパネを引きずり出す作業だった。8月は原発より30km圏内にほど近い久の浜地区での活動であった。解体・撤去される家屋から、すべての家財を搬出し、仕分ける作業であった。最近まで生活していた痕跡の見える部屋に土足で入り、ゴミとして処分する事への後ろめたさがあったが、埃まみれのなか黙々と作業を進めた。弱音を吐くボランティアは一人もいなかった。

6日間の活動を通して感じたことは、震災を風化させないこと。そのためには、今後も何らかの形で被災地と関わっていくことが大切だと思った。風化すれば復興は他人事となり、支援の輪も広がらない。自分で考え、行動し、それを伝える。これが私自身の課題だと思う。

大川看護師長よりメッセージ

6年前の4月、私はとちぎ子ども医療センターの準備室に配属となりました。センターのオープンに向けて、たくさんの方を同時進行で行わなければならませんでした。そんな中、子ども医療センターには、ボランティアの協力が必須であるというお話ができました。私自身、正直なところボランティア活動の仕組みがわかりませんでした。そこで、病院ボランティア協会が主催する研修会に参加させていただき、ボランティアコーディネーターの存在を知りました。ぜひ子ども医療センターには、コーディネーターが必要!と叫び、とても頼もしい鈴木さんが職員となり、今日に至っております。

現在、多くのボランティアの皆様のご協力のもと、この子ども医療センターは、“輝き”を増していると思っております。私は、4A病棟で勤務をしていますが、毎日、ボランティアの皆様には、子ども達やご家族、そして職員まで、たくさんの方を支えていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。今、私の自慢は、センター見学で訪れる皆様に「このセンターは、たくさんの方々に支えられています」と説明していることです。見学者からは、「素晴らしいですね!」と言葉をいただき、嬉しい限りです。これからも、ボランティアの方々ご協力をいただき、安らぎと快適な環境の中で、子ども達やご家族が安心して医療が受けられるように、看護していく所存です。どうぞよろしくお願い致します。